心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ㉓

※チラシは偶数月の第一日曜日に皆様におとどけしています。
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

小さな紳士の大きな心

友人に頼まれて、募金活動に参加した時の話です。駅前の人通りの多いところで、10名ほどで災害募金のボランティアを行いました。

友人は大きな声で「募金おねがいしまーす。」と声掛けをしています。

初めての私は駅前で大きな声を出すことに抵抗もあり、黙って募金箱を持って立っていました。通り過ぎる人は様々で、こちらを見ても通り過ぎる人、見向きもしないで先を急ぐ人。

日頃の何気ない、駅前の日常が全く違って見えました。

段々と、無視して通り過ぎる人の多さに、うんざりしてきました。困っている人が居て、私たちも頑張っているのに、なんてみんな冷たいのだろう。そんな風に感じました。

徐々に慣れてきた私も声掛けが出来るようになりました。でも、立ち止まってくれるのはほんのわずかの人だけでした。

2時間ほど経ったとき、休憩しようという話になり、一旦やめて、みんなで休憩に行きました。

その時私は、「みんな冷たいね。こんなに頑張っているのにね」と友人に言いました。友人も「そうね、案外冷たいのよ」と。

それを聞いていたリーダーに言われてしまいました。

「誰かのためにしてあげていると思ったら腹が立つよ。させてもらっていると思わなきゃね」

私ははっとしました。確かに内心、募金活動をしてあげている気持ちになっていたことに気づかされました。友人に誘われて、休み返上での募金活動を誰かに褒めてほしいと思っていたのかもしれません。

自分中心に考えている自分がいました。

考えを変えようと思って休憩後、街頭にまた立ちました。

するとすぐに、小学生ぐらいの子供連れの親子が近づいてきました。

お母さんが「よかったね。ほら」というと「お願いします」と言って、小学生の子が小銭のたくさん入ったビニール袋を恥ずかしそうに差し出してくれました。

「ありがとう。」とお礼を言いながら、お母さんと話をしました。

このお金は、お手伝いをした時のお小遣いをコツコツためたお金で、1時間ほど前に通った時に募金活動を見かけ、わざわざ家まで取りに帰ってくれたとの事でした。

お子さんが自分から、募金したいと言ってくれたそうです。感激しました。

募金をお願いしているのはこちら側なのに、こんな小さい子の方から「お願いします」と言って募金をしてくれる。

心が洗われる思いでした。

小さな紳士の募金で募金箱はずっしり重くなりました。実際の重さ以上に感じながら晴れやかな気持ちで、募金活動を続けることが出来ました。

しっかりとこの想いを届けなければならないと感じると共に、多くの事に気づいた1日となりました。

善をなすは耕うんのごとし
中江藤樹

善い行いと言うのは、すぐに結果の返ってくるものではなく、田畑を耕すようなものであると説いています。やがて実りを迎えて思いがけないところで自分に返ってくると考え、利他の心を実践したいものですね。

あなたの町のアーバンホール
葬儀・法要・ギフト アーバンホール

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしています。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。
◆応募先／アーバンホール『ちょっといい話』係　〒710-0841 倉敷市堀南805-1◆記入事項／①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度（原稿用紙・ワープロいずれも可）にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。